

蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」

千賀由佳

はじめに

『歸蓮夢』は「白蓮教」と名づけられた民間宗教による反亂を扱った白話小説である。この小説については、孫楷第氏が『中國通俗小説書目』（北京作家出版社、一九五七）の明清小説部乙、靈怪に著録しているほか、譚正璧氏が『古本稀見小説彙考』（浙江文藝出版社、一九八四）で、澤田瑞穂氏が『宋明清小説叢考』（研文出版、一九八二）で紹介し、物語の大略や成立を概説している。また比較的まとまった先行研究として、林辰「歸蓮夢」（『明末清初小説述録』、春風文藝出版社、一九八八）は物語中の白蓮教反亂軍の失敗の原因を追究し、蕭相愷「蘇庵主人的《繡屏緣》和《歸蓮夢》」（『珍本禁毀小説大觀』裨海訪書録、中州古籍出版社、一九九二）は同一作者による小説『繡屏緣』と同時に論じて作者の「不同世俗」の精神を見だし、萬晴川「白蓮教與《歸蓮夢》」（『中國古代小説與民間宗教及社會之關係研究』、人民文學出版社、二〇一〇）は『歸蓮夢』の「白蓮教」と歴史上の白蓮教の成り立ちや特徴を関連づけて論じている。また近年では姚戈麗「論《歸蓮夢》的筆法」（内蒙古師範大學『語文學刊』二〇一〇年第十期）や李文月「無目的的追求――

《歸蓮夢》的文本解讀」（北嶽文藝出版社『名作欣賞』二〇一三年第十一期）など、才子佳人小説としてのユニークさに注目した短い論考も出されている。しかしながら長編の専論は管見の限りでは見受けられない。本稿では『歸蓮夢』をあらためて紹介するとともに、登場する民間宗教の「白蓮教」に焦點を當て、他の小説との比較を通じてそこに描かれる「白蓮教」の特徴や物語全體の中で持つ意味について論じ、白蓮教などの民間宗教の民衆の間での受けとめられ方を同時代の文學作品の中から探つてゆきたい。

一、『歸蓮夢』版本と作者

『歸蓮夢』の成立年代について、孫楷第氏は日本の寶曆甲戌四年（二七五四）の舶載書目にこの本が記録されていることを指摘している。また譚正璧氏は雍正・乾隆年間に作品を残した女詩人張令儀が『歸蓮夢』を元に戯曲『夢覺關』を著したことを指摘している¹⁾。鄭振鐸「巴黎國家圖書館中之中國小説與戲曲」（『中國文學研究』下卷所收。作家出版社、一九五七）はパリ國立圖書館所藏の『歸蓮夢』を明刊本としている。鄭氏が調査の折に参照したモリス・クローランによる目録は

『パリ國立圖書館所藏漢籍解題目錄』（霞ヶ關出版株式會社、一九九四）で見ることができ、この目錄は所藏の『歸蓮夢』について「A la fin des Ming (明末)」と記載するが、インターネット上で公開されている『歸蓮夢』の畫像データを閲覧しても、これを明刊本とする直接の根據は見當たらない。『歸蓮夢』作者の蘇庵主人が康熙庚戌（一六七〇）に『繡屏緣』を著していることから、蕭相愷氏は『歸蓮夢』を康熙年間成立と結論づけ、「蘇庵二集」とされる『歸蓮夢』に對し『繡屏緣』が「蘇庵一集」にあたるのではと推測している。『歸蓮夢』第一回の冒頭に「話説明朝末年」とあることから明朝滅亡以降の作品であることは明らかであり、『中國古代小說總目・白話卷』（山西教育出版社、二〇〇四）などの事典が多く「清代小説」としている通り、筆者としても『歸蓮夢』の成立は『繡屏緣』成立に程近い順治もしくは康熙年間と考える。

版本は有序文繁本と無序文簡本の二つに分けられ、後者は字數にして前者の七割に満たない。文繁本としては上海圖書館藏本（上海古籍出版社『古本小説集成』所收）と前述のパリ國立圖書館藏本がある。この二つは同版で、本文半葉八行二十字、版心葉數は回ごとである。『歸蓮夢序』、「蘇庵二集歸蓮夢目次」、本文の順になつており、後者にのみついている封面には「傳奇二集／蘇庵主人編次／歸蓮夢／本館藏板」とある。巻首題「新鐫繡像小説蘇庵二集歸蓮夢」、巻末に「蘇庵主人新編／白香居士校正／慈菴□□全訂／蘇庵二集歸蓮夢終」（□の部分はずががすれて解讀不能）。序の末尾に陽刻「蘇庵式集」、陰刻「堊史名家」、巻末に陽刻「白簡名本」、陽刻「茲菴」、陰刻「蘇庵主人」の印章が見える。天一出版社『明清善本小説叢刊』所收の『歸蓮夢』はパリ國立圖書館本と書込みや缺頁が一致するが、封面と巻末の印章

が見えない。文簡本の第一は大谷大學の藏する『歸蓮夢』四卷、十行二十四字本で、筆者はマイクロフィルムで閲覧した。四卷十二回、版心葉數は卷ごと、封面缺、目錄と本文のみ。目錄に「歸蓮夢目錄／蘇庵主人新編／白香居士校正」とあり、第二卷卷頭にも「蘇庵主人編次」とある。東京大學東洋文化研究所倉石文庫所藏の刊本『歸蓮夢』四卷は筆者の調査では十行二十四字で大谷大學藏本と同版である。封面缺。大連圖書館所藏の『歸蓮夢』抄本は、その影印を『大連圖書館藏孤稀本明清小説叢刊』（大連出版社、二〇〇〇）で確認できるが、第一頁に「蘇庵主人編次／歸蓮夢／得月樓藏板」とある。この抄本は内容や行組みが大谷本・倉石本と全く一致しており、假に大谷本に據るものとすれば、『倉石文庫漢籍分類目錄集部（稿）』で所藏の『歸蓮夢』が得月樓藏板とされているのも正しいことになる。臺灣廣文書局『筆記七編』は同版の刊本の影印本、春風文藝出版社『明末清初小説選刊』は抄本による排印本である。文簡本の第二は早稻田大學藏本で十二行二十八字、封面に「歸蓮夢／藏板」、目錄に「尙志堂藏板／蘇庵主人新編／白香居士校正」とある。四卷十二回、目錄と本文のみ。風陵文庫藏本は筆者の調査では十二行二十八字、早稻田大學藏本と同版で、ただ封面だけが缺けている。以上、版本は管見の限りで三種類あり、大塚秀高編著『増補中國通俗小説書目』（汲古書院、一九八七）によれば、これに早稻田大學藏本と版元を同じくする、馬廉舊藏にして北京大學藏「泉州尙志堂藏板」八行二十一字本が加わる。筆者の確認した二種類の文簡本の間には細かい字句の異同がみられるだけで、文繁本からの脱落箇所はほぼ一致しており、どちらかがどちらかを參考にしたのではないかと疑われる。本論文では文繁本の影印を収録した『古本小説集成』に基づいて論を進めていくこととする。

作者である蘇庵主人の本名や生没年は不明である。蕭相愷氏は『繡屏緣』本文中に吳語や蘇州地方の山歌が見られることから、蘇庵主人は蘇州またはその近隣地區の人ではないかと述べている。その一方で文革紅『清代前期通俗小説刊刻考論』（江西人民出版社、二〇〇八）では、「吳歌」「山歌」ではなく「蘇州山歌」という語句が選ばれ、いくつかの吳語にわざわざ注釋がついていることから、作者は蘇州人ではなく、『繡屏緣』の舞臺となっている杭州の人ではないかとの考察がなされている。またその暮らし向きや思想について、蕭氏は『繡屏緣』では作者が自作の詩文を本編である小説に附して共に出版しているが、これは詩文を出版するあても資金もなかったためであり、蘇庵主人が貧乏であったことを物語っているのだろうと述べ、また『繡屏緣』第十一回末の附言に「余困雞窗有年、今且爲絳帳生涯、旦夕佞佛（私は何年も書齋に閉じこもっており、いまは生計のために教師をしているが、日夜佛教にすがっている）」とあることから、『歸蓮夢』執筆の時点で蘇庵主人はすでに俗世に見切りをつけ、佛教信仰に足を踏み入れていたと推測する。卷末署や目録にある白香居士なる人物については『繡屏緣』第十四回末の附言で「憶余往時、讀書城東小樓、與白香居士、討論時義得失、雅相善也（思い起こせばかつて私は城東の小樓で讀書し、白香居士と時勢のことや得失について話し合い、はなはだ親しく交わった）」、「白香英才蔚發、自是金馬玉堂人物（白香は才知に溢れ、漢代なら金馬門、宋代なら玉門署に在るべきすぐれた文學の士である）」と紹介されている。

なお、『歸蓮夢』は乾隆年間に禁書になっている。清代の陳乃乾が編纂した「禁書總録」には「歸蓮夢」の名が見え、四庫館及び軍機處の奏上により全燬されたことが示されている。また乾隆四十年代に湖

蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」

北省巡撫の姚成烈という人物が奏上した百六十八種にのぼる禁書リストの中にも作者不明の『歸蓮夢』一部が記録されている。

二、あらすじ

『歸蓮夢』全十二回は、女主人公白蓮岸が天書を授かって「白蓮教」を創始し勢力を広げるが、やがて朝廷に敗れて出家するという榮枯盛衰の物語を主軸にし、そこに王昌年と崔香雪という一對の男女のすれ違いの戀物語が絡んでくる構成となっている。あまり知名度が高いとはいえない小説のため、まずは簡略な筋書きを以下に記す。

白蓮岸は明末の山東泰安で生まれるが、飢饉のため幼くして両親を亡くし、泰山にある湧蓮庵の和尚である眞如のもとに引きとられる。

しかし蓮岸は生來人一倍聰明で野心家であり、十七、八歳になると俗世で偉業を成し遂げたいと考え湧蓮庵を出る。下山の道中、白鬚の老人に出會うが、實はその老人は長年修行を積んで人に化身した白猿であった。蓮岸は彼が天帝から言いつけられて見張っていた天書『石室相傳祕本陰符白猿經』を授かり、さらに槐蔭堂という古い關帝廟で盜賊が残していた莫大な銀を見つける。以後蓮岸は槐蔭堂に住んで、眞如和尚から授かった靈符で近隣の貧しい百姓の病を治療したり、銀を分け與えたりしたために、度重なる災害や飢饉に苦しんでいた人々は蓮岸を頼って續々と槐蔭堂に集まった（以上第一回）。

蓮岸はみずからの名聲が高まってきたので教門を創立して「白蓮教」と名づけ、槐蔭堂に集まってきた人々の中から特に文にすぐれた宋純學と武にすぐれた李光祖の二人を選んで部下とし、反亂の機會をうかがっていた。ところが官府に目をつけられてしまったので、山東の森深くにある柳林を根城としていた山賊の親分を蓮岸が酔わせて殺

し、殘黨には神通力を示して味方につけた上で、この柳林に白蓮教の本據地を移して掠奪や軍事訓練を行わせる。さらに宋純學に命じて異才の人を探させ、程景道という槍の名手を白蓮教に引き入れる(第二回)。

程景道が出した、白蓮教を盛り立てるための三つの提言に従い、蓮岸は資本作りのために大きな郡に部下を派遣して店舗を開かせ、李光祖に豪傑を探しに行かせ、また自分は宋純學とともに文人を探すために男装して名前を白從李と變え、都へ行くことにするが、それは實は武則天が張六郎を寵愛したように自分にも愛人が必要と考えたためでもあった。さて開封に崔世勛という百戸があり、その娘の名を崔香雪といった。崔香雪には從兄の王昌年という許嫁がいたが、父が白蓮教討伐に出陣してからというもの、父の後妻である焦氏とその連れ子である焦順に王昌年ともどもいじめ抜かれていた。そこで困り果てた昌年は崔世勛を連れ歸ろうと、一人西安へ出發した(第三回)。

實は崔世勛は陝西で一度は李光祖を負かしたものの、そこを訪れた蓮岸の方術により白蓮教の捕虜となつていたのである。その數日後、宋純學とともに西安を訪れた蓮岸は偶然王昌年と出會い、金持ちの若旦那と身分を偽つて事情を聞き出す。昌年の美貌と文才を好ましく思つた蓮岸だが、彼が許嫁の崔香雪を一途に思つてゐるのを知り、ひとまず王昌年と宋純學を北京の監學に入らせて科擧の勉強をさせ、自分は崔香雪の消息を探りに開封へ向かう。そこで香雪が金持ちの後妻になるよう繼母から迫られていることを知つた蓮岸は、昌年のために香雪の貞操を守ろうと、李相公と名乗つて男装したまま香雪に婿入りする(第四回)。

香雪は最初のうち頑なに蓮岸を拒んでいたが、蓮岸が實は女であ

り、昌年の話を聞いて自分を助けに來たのだと告げられてすつかり打ち解け、爾後二人は、晝は夫婦、夜は姉妹として仲睦まじく過ごすようになった。ちょうどその頃香雪の様子を見に都から開封に戻つてきた昌年は、香雪が結婚したと聞きひどく失望して都に歸り、まもなく宋純學と共に科擧に合格し、めでたく官職を得る。いつぼう蓮岸は程景道からの手紙で柳林に呼び戻される(第五回)。

殘された崔香雪は、蓮岸が女であることを知る者がいたことから、男装した白蓮教の女首領を捜していた官府に捕らえられ、都まで連行された。いつぼう柳林の白蓮岸は夢の中で瀕死の王昌年と再會し、もともと抱いていた野望が昌年を愛したためにすり減つてしまつたと告白する。刑部の役人になつていた昌年は香雪の取り調べにあたるが、香雪が貞操を捨て自分を裏切つたと誤解している昌年は香雪を責め立てる。蓮岸の命を受けた宋純學は昌年の誤解を解くとともに香雪に上奏文を書かせて無罪放免に持ちこんだ。そこで昌年は勘違いを謝ると同時に改めて結婚を申し込むが、香雪は許そうとしない(第六回)。

一度家に戻つて身邊の整理をしたいと開封へ歸ろうとした香雪は、その道中、偶然白蓮教の手の者の略奪に遭つて柳林に連れてこられ、蓮岸や亡くなつたと思つていた父の崔世勛と再會を果たして喜びあう。程景道と李光祖は兵を率いて、各地の反亂の賊を降伏させて白蓮教の勢力に組み込んでいったが、ある日攻め込んだ相手が五行陣を敷いたために、李光祖は敗走し、程景道は蓮岸の神通力を借りて五行陣を破る。光祖は迷い込んだ村で出會つた空翠という娘と結婚を約束して柳林に戻る(第七回)。

王昌年は宋純學とともに崔香雪を訪ねて行くが、開封に着いたところ香雪が戻つてきていないことを知る。失意の昌年は満開の桃の木

下で一人の美女に出會うが、それは實は前世で昌年と縁のあつた桃の花神だつた。花神は宋純學とその花嫁の縁を結び、また昌年に香雪と再會する夢を見せる(第八回)。

柳林にいた崔香雪も同じ夢を見ていたが、白蓮岸の鍊成した寶鏡の光で眼が覺めてしまう。この寶鏡を狙つたのが、同じ山東の聞香教という邪教だつた。これは王森という人物が妖狐の助力を得て創設したもので、やはり多くの人を集めて勢力を伸ばしていた。王森は妖狐と謀つて寶鏡を盗み出すが、妖狐は崔香雪の美貌に惹かれて戻つてきたところを程景道に刺し殺され、王森も程景道を下したものの寶鏡から出てきた天神に打ち殺される。敗走後、柳林に戻りかねていた程景道は白鬚の老人と出會い、その紹介で泰山白雲洞の隱士に弟子入りする。その後白鬚の老人は柳林の蓮岸を訪れる(第九回)。

白鬚の老人は湧蓮庵の眞如和尚のもとから蓮岸を連れ戻しに來たのだと告げる。實は天書を蓮岸に傳えたために罰を受けた白猿が、天書を取り返すためにやつてきたのだつた。蓮岸は天書の返還を拒絶するが、白猿の神通力によつて結局天書を奪われてしまう。その頃崔香雪の義理の兄である焦順は崔世助の職位を繼ぐと都へ出てくるが、四靜という惡僧に美人局で騙された後、白蓮岸の手下が捕縛される場面に出くわす(第十回)。

手下の供述で王昌年と宋純學が蓮岸と關わりを持つていたことが露見し、二人は捕らえられる。天書を奪われて神通力の源を失つた蓮岸は戦闘意欲をも失くしてしまい、王昌年を救うために朝廷に降るが、首をはねられて處刑される直前に眞如和尚から授かつた丸薬を飲み、その効果で死を免れる。昌年もさいわい死罪を免れ官職を解かれて開封に戻るが、その途中で花神と再會し、樹の中にある宮殿に案内され

る(第十一回)。

屋敷に着いた昌年は、父と共に先に開封に歸つていた香雪が今さつき死んだと告げられる。悲しみに暮れる昌年だが、花神の助けで實は仙界で働いていた香雪を人間世界に連れ戻し、二人はようやく結婚するのだつた。湧蓮庵に戻つた蓮岸は昌年のことを忘れられずにいたが、ある日昌年に裏切られる夢を見た後、眞如和尚に俗世の空しさを説かれ、また自身の前世が如來の座る蓮花だつたと知らされたことで、豁然として悟り、はじめて心から佛門に歸依して眞如和尚の後を繼ぐ。數箇月後、官職に戻り、純學と共に山東を訪れた昌年は、隱士の下で修業を積んで道人となつた程景道と再會し、百姓になつた李光祖も誘つて湧蓮庵の蓮岸を訪れる。蓮岸は彼らに名利を求めることの空しさを説き、それぞれと詩を交換して別れる。後に昌年ら四人は道人となつて昇仙し、蓮岸は立地成佛したと傳えられる(第十二回)。

三、『歸蓮夢』のヒロイン白蓮岸と唐賽兒

澤田瑞穂氏は『宋明清小説叢考』で『歸蓮夢』が「白蓮教の女教祖を主人公とする點では、永樂年代の唐賽兒をモデルとすることは疑いない」と述べているが、唐賽兒とはどのような人物か。明史卷百七十五衛青傳は次のように語る。

永樂十八年二月、蒲臺妖婦林三妻唐賽兒作亂。自言得石函中寶書神劍、役鬼神、剪紙作人馬相戰鬪。徒衆數千、據益都御石柵寨。……總兵官安遠侯柳升帥都指揮劉忠園賽兒寨。賽兒夜劫官軍。軍亂、忠戰死、賽兒遁去。比明、升始覺、追不及、獲賊黨劉俊等及男女百餘人。……鰲山衛指揮王眞亦以兵百五十人殲賊諸城、賊遂平。而唐賽兒卒不獲。

永樂十八年二月、蒲臺縣の妖婦であり林三の妻である唐賽兒が亂を起こした。石の箱に入った寶書と神劍を得て、鬼神を使役し、紙を切り抜いて人馬として戦わせることができると稱した。衆徒數千人が、益都の御石柵寨に立てこもった。……總兵官の安遠侯柳升は都指揮の劉忠を率いて賽兒のとりでを包圍した。賽兒は夜に官軍を急襲した。軍は亂れて劉忠が戦死し、賽兒は逃げ去った。明け方になって、柳升はやつと氣づいたが、追いつかず、賊軍の劉俊ら及び男女百餘人を捕らえた。……鰲山衛指揮の王眞はまた兵士百五十人によつて諸城の賊を殲滅し、賊はようやく平定された。しかし唐賽兒はついに捕まらなかつた。

『明成祖實錄』はこれに加えて、唐賽兒の行方を追う成祖が唐賽兒が落髮して尼あるいは女道士の中に紛れているのではないかと考え、北京と山東の尼と女道士を全員捕らえて京師に連行し取り調べたが、結局捕らえることはできなかったことを述べている。

明史や實錄には唐賽兒と白蓮教を直接結びつける記述はみられないが、山根幸夫氏は「山東唐賽兒起義について」（『明代史研究』創刊號、明代史研究會、一九七四）の註7で、『萬曆安丘縣志』卷二十八趙琬傳に「趙琬）與郝簡同習白蓮之術、煽動遠近。與蒲臺妖賊唐賽兒等謀作亂（趙琬は郝簡と共に白蓮の術を學び、遠くの人々まで扇動した。蒲臺の妖賊である唐賽兒と謀を等しくして亂を起こした）」云々とあることから「白蓮教の術を習つた趙琬が、唐賽兒と行動を共にしたわけであるから、彼女が白蓮教徒であつたことは確かである」と述べている。また野口鐵郎氏も『明代白蓮教史の研究』の中で、唐賽兒の用いたと傳えられる術が「白蓮教などの祕密宗教」において頻見されるものであり、さらに事件の舞臺となつた諸州は「いずれも元末の韓林兒集團の

麾下にあつた毛貴の支配地であつた」ことから、唐賽兒を韓家の白蓮教に連なる存在であると論じている^①。

この唐賽兒を實名で主人公に据えた小説がある。『初刻拍案驚奇』卷三十一「何道士因術成奸 周經歷因奸破賊」（以下「何道士」と略稱する）は次のような物語である。山東の青州府萊陽縣出身の寡婦である唐賽兒は夫を弔つた歸りに、寶劍と鎧兜、「九天玄天混世眞經」という名の天書が入つている石匣を見つける。唐賽兒は道士の何正寅と夜に密會して天書を修得するが、村人から密告を受けた知縣に兵を差し向けられる。賽兒は天書から身につけた法术や符呪で萊陽縣を陥落させたうえ青州府役所にまで攻め入つた。そこで青州府の周雄という名の經歷が、若く美しい男女を唐賽兒と何正寅のところに送り込んで仲間割れさせ、宴會で酔いつぶれた唐賽兒を聞者に殺させて勝利をおさめたという。呂熊『女仙外史』もまた唐賽兒を主人公とする清初の小説であるが、ヒロインの性格づけは先の「何道士」とは對照的である。この物語の中では唐賽兒は嫦娥の轉生であり、靖難の役で帝位を追われた建文帝を守り立てるために燕王に對して反亂を起こす。唐賽兒は儒家道德の體現者であり、九天玄女から直々に天書を授かるのである。

史書と比べてみれば、「何道士」の唐賽兒は妖術を操つて邪惡をなすばかりか、怪しげな道士と通じたり、若い男たちを常時身邊に侍らせたりする淫亂な女として描かれ、『女仙外史』でも反亂の動機や唐賽兒の人物像に大幅な脚色が見られる。この二つの小説のいずれにも、唐賽兒と白蓮教との關連については記されておらず、『歸蓮夢』のように主人公が民間教門を開くという描寫もない。ただ「何道士」の入話の最後には

不知這些無主意的愚人、住此清平世界、還要從着白蓮教、到處哨聚倡亂、死而無怨、卻是爲何？

なぜかこういつた考えなしの愚か者が、この太平な世界に住んでいるながら、なおも白蓮教に従って至るところで集結して反亂を起し、死んでも怨まないなどというのは、いったいどうしてでしょうか。

と反亂者の親玉として白蓮教の名が引き合いに出されている。

『歸蓮夢』の主人公は白蓮岸と架空の名をつけられ、時代設定も明末とされているものの、歴史上の唐賽兒とは山東出身の女性であること、方術を操って反亂するが處刑は免れたこと、そして何より白蓮教と關わりを持ったことなどの共通点があり、作者は唐賽兒を意識して白蓮岸を造形したと考えるべきであろう。

四、白蓮岸の「白蓮教」

『歸蓮夢』の「白蓮教」について語る前に、まず同名である歴史上の白蓮教について簡単に紹介しておく必要がある。宋代の宗鑑が完成させた天臺宗史『釋門正統』の卷四には、紹興年間に茅子元が「白蓮」と呼ばれる男女同修の念佛結社を創始したことが記されている。

元代に廬山東林寺の普度が著した『廬山蓮宗寶鑑』は、その跋で『觀無量壽經』の「若念佛者、當知此人則是人中芬陀利華（もし佛を念ずる者があるなら、その人は人間の中の白蓮華であると知るべきである）」との言葉を引用して東晉の慧遠の念佛結社である白蓮社の名前の由來を説明するとともに、茅子元の結社の源流を慧遠まで遡っている。その一方で、『釋門正統』などに基づく南宋志磐の『佛祖統紀』卷四十八には、茅子元の教門「白蓮菜」について人々を惑わす「邪教」として

蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」

非難する記述が既に見られる。その後白蓮教は轉機を迎える。元末に「白蓮會」の家系である韓山童が「彌勒佛下生」を唱えて反亂を起し、以降明末にかけて、白蓮の名と彌勒信仰とが結びついた同様のスローガンを掲げる數多の民間宗教結社による反亂が各地で續發したのである。官憲側はこれをひとまとめに「白蓮教」または「白蓮社」などという名で記録してきた¹³。明末清初、無爲教もしくは羅教と呼ばれる民間宗教の影響で、白蓮教は再び教義上の轉換點を迎える。この時期に民間教門自身によって著された經典である寶卷に示される信仰を、淺井紀『明清時代民間宗教結社の研究』は、人類の父母である無生父母の住む天上世界への「還郷」を願う無生父母信仰、阿彌陀佛の掌る西方淨土への往生を願う淨土信仰、そして未來を掌る彌勒佛の降生を願う彌勒下生信仰という三つの要素にまとめて論じている¹⁴。

これを『歸蓮夢』の「白蓮教」と照らし合わせてみると、まず「白蓮教」の信仰對象として彌勒佛ないしその代替になるような神格の名が出てくることはない。また例えば葷酒や殺生を禁じるといった戒律の描寫もない。白蓮岸が「白蓮教」を創立するまでの經緯は第二節のあらずじに示したが、その名の由來については第二回にこう語られている。

這個喚做「白蓮教」。因他父親姓白、生時¹⁵有蓮花之異。想那眞如法師、取名蓮岸、便有一股天機在內了。

この宗教は「白蓮教」といいました。というのも蓮岸の父が姓を白といい、生まれる時に蓮の花の兆しがあったからです。思うにあの眞如和尚が名を蓮岸とつけたのには、一つ天機が隠されていたのでしょう。

「蓮花之異」とは白蓮岸の出生前に父親が夢で蓮の花を見たことを指

す。また眞如和尚は「你既到我湧蓮庵來、正如落水的人巴到岸上一般（おまえがわが湧蓮庵に來たのは、ちょうど溺れた人が岸にすがりつくのと同じだ）」と言つて孤兒の少女を蓮岸と名づけたが、湧蓮庵という名は眞如和尚が山中の泉に蓮の花が湧き出すのを見てそこに庵を結んだことに由來する。つまり「白蓮教」という名は全く白蓮岸自身の身の上に基づいているのである。

なお、『歸蓮夢』第九回には「聞香教」という民間宗教が登場するが、こちらも史書に同名の民間宗教が記録されている。『明史』卷二百五十七趙彥傳には「薊州人王森得妖狐異香、倡白蓮教、自稱聞香教主（薊州の人である王森は妖狐の異香を得て、白蓮教を倡え、聞香教主を自稱した）」とあり、『明史紀事本末』卷七十には徐鴻儒が王森の息子王好賢や于弘志と共謀して蜂起したことが記されている。『歸蓮夢』では王森の生前すでに王好賢が徐鴻儒らと關わりを持つていた點や于弘志の名が于志弘とされている點など食い違いもあるが、「聞香教」の設定はこれらの史書の記述と一致するところが多い。『明史』の記述からは聞香教もまた白蓮教の一種とみなされていたことが分かるが、『歸蓮夢』の中では「聞香教」は「白蓮教」に敵對する別の宗教とされている。

以上、實在の民間宗教としての白蓮教と『歸蓮夢』の民間宗教を比較したが、續いて他の小説と比較しながら白蓮岸の「白蓮教」の特徴を二つに分けて検討していきたい。

四一―、白蓮岸の「白蓮教」―その方術

白蓮岸の白蓮教の第一の特徴は、さまざまな方術を操つて戦うことである。その源となるのが『白猿經』、別名『石室相傳秘本陰符白猿

經』である。この書は物語の中で「天書」と呼ばれるが、その内容は「兵書」であり、「中間盡是天文地理陰陽變幻之術（中身はすべてこれ天文地理・陰陽變幻の術）」であつた。同名の書物で實在するものには明劉基撰『白猿經風雨占候說』、別名『白猿風雨圖』があるが、内容はほぼ空模様からの天氣豫測で陰陽變幻への言及はなく、『歸蓮夢』の『白猿經』とは別物であろう。

白猿が小説に登場する例として、古くは唐代傳奇の『補江總白猿傳』があり、『古今小説』第二十卷「陳從善梅嶺失渾家」もこれと同じく白猿の精に妻をさらわれる物語だが、そこに出てくる白猿は『歸蓮夢』の白猿と同様に魔力を持ち洞窟と結びついた存在である。さらに『平妖傳』（四十回本）には天書と白猿との結びつきがみられる。『平妖傳』と『歸蓮夢』の白猿はいずれも仙界から任命された天書の見張り役で、天書を不相應な人間に傳授すればただちに罰を與えられるのである。

この『白猿經』から方術を會得した白蓮岸は、主に戦争の時に攻撃や防禦のためにそれを使うようになるが、時に敵も方術を操り方術合戦の様相を呈する。それらの方術の中には、たとえば「騰陰掩地法」というものがある。以下は『歸蓮夢』第二回で柳林を根城にしている山賊の頭目たちとの戦いの場面である。

忽然天色昏暗黑風捲地、衆頭領俱嚇呆了。蓮岸手拿一盆清水、向外邊傾出去、便有一陣大雨、雷電交作。這是《白猿經》上的叫做「騰陰掩地法」。

突然空が暗くなつて黒い風が地に捲き起こり、頭目たちはみなびっくり仰天しました。蓮岸が清水の入った盆を手に取り、外側へ傾けて注ぎ出すと、すぐに一陣の大雨があり、雷鳴と稻妻が交錯

しました。これは『白猿經』にある「騰陰掩地法」というものです。『平妖傳』第三十八回で王則の軍に味方する聖姑姑が使う方術は、これに似た効果を有している。

聖姑姑披髮仗劍、牽着一疋白馬、在陣中叩齒作法、脚下步魁罡、口中念念有詞、喝聲道「疾！」、把劍尖刺着白馬的頭、刺出血來、噙口水、出到陣前一噴。不噴時天清日朗、噴了時只見烏風猛雨、霹靂交加、飛砂走石。那陣風吹得黑魃魃地、對面不相見、伸手不見掌。

聖姑姑は髮をふり亂し劍を手にして一匹の白馬を引いてくると、陣中で齒を嚙みならしてまじないをし、脚では魁罡を踏み、口中ではしきりに呪文を唱え、「カツ！」と一聲叫ぶなり、劍の先を白馬の頭に突き刺して血を出し、その血を口に含んで陣の前に出てぶつと噴き出しました。噴く前には天氣明朗だったものが、噴き出すとにわかには黒風猛雨が起り、雷が加わって、砂が飛び石が轉がりました。その風が吹いたために眞つ暗になり、向かい合つても顔が見えず、手を伸ばしても掌が見えないほどです。

また紙人紙馬という術もある。『歸蓮夢』第七回で五行陣を敷いた道人が行使するのがそれであるが、白蓮岸の部下の程景道によって破られる。

景道仔細一看這些人馬、却是紙做的、一樣紅紅綠綠、旗號分明。景道識破邪術、即將火球火箭放進去、不上數刻、燒那五行陣片甲無存。

景道がこれらの人馬を仔細に見てみると、なんと紙で作つたもので、どれも色鮮やかで旗の文字もはっきりしています。景道は邪術と見破り、火の球や火の矢を放つて進み、數刻もしないうちに、

その五行陣を焼きつくし殲滅してしまいました。「何道士」には

賽兒看見兵快來拿人、嘻嘻的笑。拿出二三十紙人馬來、望空一撒、叫聲「變！」。只見紙人都變做彪形大漢、各執鎗刀、就裡面殺出來。賽兒は兵士が捕まえにやつてくるのを見て、くすくす笑いました。二、三十の紙の人馬を取り出すと、空へ投げ上げ、「變われ！」と叫びます。すると紙の人形は全てたくましい大男に變わり、それぞれが鎗や刀を手にして、すぐに中のほうから打つて出てゆきました。

とあり、よく一致する。『平妖傳』の胡永兒もわらと豆で人馬を作つて軍隊としている。

さらに『歸蓮夢』第七回には萬能の働きを持つ「神鏡」の話が出てくる。

又《白猿經》上有「神鏡降魔」一法、從李依法煉成一面鏡子。……人有來照的、若是武官、便現出金盔金甲、若是文官、便現出紗帽圓領、若是軍卒、便現出刀鎗弓箭。却又奇怪、從李自家照面、再不見什麼、止現出一朵蓮花。

また『白猿經』には「神鏡降魔」という法があり、從李はその法に従つて一張りの鏡を錬成しました。……人が來て姿を映すと、武官ならば金の鎧兜を現わし、文官ならば紗の帽子に丸襟を現わし、軍卒ならば刀や槍、弓矢を現わしました。そしてまた不思議なことに、從李が自分で顔を映すと何も見えなくなり、蓮の花が一つ現れるばかりでした。

從李とは白蓮岸の變名である。『聊齋志異』卷六「白蓮教」という話にはこれと似た鏡が登場する。

白蓮盜首徐鴻儒、得左道之書、能役鬼神。……因出一鏡、言能鑑人終身。懸於庭、令人自照、或幘頭、或紗帽、繡衣貂蟬、現形不一。人益怪愕。……因亦對衆自照、則冕旒龍袞、儼然王者。

白蓮教の盜賊の首領である徐鴻儒は左道の書を得て、鬼神を使役することができた。……そこで鏡を一枚出して、人のゆくすえを占うことができると言った。庭に掛けて人に自分の姿を映させれば、ある者は頭巾、ある者は紗帽、刺繍した服や絹織物など、現れる姿はさまざまだった。人々はますます驚き怪しんだ。……よつてまた人々の前で自分の姿を映してみせれば、天子の冠や龍を縫い取つた禮服で、まるで王者のようだった。

以上見たように、『歸蓮夢』に出てくる方術の中には、他の小説で描かれる方術と類似や一致が見られるものがある。このうち『聊齋志異』では「白蓮教」の名のもとに方術が使われるが、その他はそうではない。『平妖傳』に登場する王則は『宋史』明鑑傳に「言釋迦佛衰謝、彌勒佛當持世（釋迦佛が衰え彌勒佛がこの世を支配するようになると言つた）」と記述され、彌勒教匪として有名である。¹⁶にもかかわらず『平妖傳』には反亂と彌勒信仰とのかかわりは描かれない。これは「何道士」、「女仙外史」が唐賽兒を描く際に白蓮教という言葉を使つていないのと同様である。しかしながら登場人物の操る方術のありさまについて、『歸蓮夢』と他の小説の間には類似が認められ、いずれもいわゆる民間宗教に對する共通のイメージを反映していると考えられる。

四一二、白蓮岸の「白蓮教」——その社會事業

白蓮岸の白蓮教の第二の特徴は、民衆に向けて治病や金銭的援助と

いつた社會事業を行なつてゐることである。まず治病に關して、第一回で白蓮教創始前の蓮岸は、眞如和尚から預かつていた「大藏經内抄出治瘧靈符」を用いて山東の小民の病を治す。この靈符の内容は二つの部分から成る。まず漢字の冠と他の漢字を組み合わせた獨特の文字が四つと「敕令」の句そしてレレレという三つの點から成る呪符の部分、續いて「嚇嚇陽陽、日出東方、神筆在手、驅除妖妄、吾奉天帝、急急如律令、敕」という呪文の部分である。その出典は明らかでないが、道教や密教で用いられる呪符にはこれと甚だ類似したものがあり、たとえば道教經典の『道法開元』には「治瘧靈符」の呪符部分の文字と同じく漢字の構成要素を組み合わせた奇妙な文字が複数收められているし、呪文部分の「日出東方」「急急如律令」などという句も『道法開元』のほか、『千金翼方』という醫術書の「禁經」すなわち病氣を呪文によつて治癒し豫防するという部分の中に多く見つけることができる。新興宗教が符籙などを用いて病氣治療を行うことは、古くは『後漢書』皇甫嵩傳などに見られ、より時代が下つてからの記録としては、查繼佐の『罪惟錄』列傳卷三十一に明代の事件が取り上げられている。

張金峯、妖僧、不知何許人。初遊陝西朝邑、頗以藥餌・符呪惑衆、縣官逐之。

張金峯は妖僧であり、どこの人かは分からない。初めに陝西の朝邑に遊び、藥や符呪によつて衆を惑わしたので、縣官はこれを追い拂つた。

小説の中では、たとえば『女仙外史』第四十八回に、何仙姑が身につけた蓑を少しづつ切り取つて病人に飲ませ、傳染病を治す場面が出てくるが、これに比べて『歸蓮夢』に描かれる治病の様子はより現實的

であり、呪符の内容まで事細かに紹介されている。

次に金銭的援助であるが、蓮岸が

我雖是個女師、乃是東嶽泰山湧蓮庵中活佛的徒弟、當初受本師的戒律、端一賑濟貧人。如今列位不但病好了、若是有家內困乏的、不妨稍稍資助。

私は女ではあるけれど、東嶽泰山の湧蓮庵にいる活佛の弟子で、専ら貧しい人を助けなさいという先生の戒律を受けてきました。

いま皆さんは病気が治ったけれど、それだけでなく、もし家計が苦しい人がいれば、少しばかり資金援助をしてあげましょう。

と申し出ると人々は「全不問湧蓮庵中甚麼活佛、但是現在肯濟急的就是個活佛了（湧蓮庵の活佛などどうでもいい、とにかくいま急場を救ってくれるのが活佛だ）」と續々と集まつてきた。そこで蓮岸は「白蓮教」を創始してこう言い聞かせた。

如今但有人我教者、不論老少男女、個個使他衣食飽暖、不受世間愁苦之累。

今、私の教門に入った人だけは、老若男女を問わず、皆衣食に飽き足らせ、この世の辛さ苦しさから守つてあげましょう。

このように無償で金銭を與えて民衆の心を集めることは、方術と反亂を扱つた他の小説にも登場する。『平妖傳』第三十二回と第三十三回では王則一味が貝州知事を倒してその財産を貝州の兵士や貧乏な商人に分け與え、『女仙外史』第九回では唐賽兒が飢饉に苦しむ民衆に亡夫の遺産を施したうえ貪欲な濟南府知府を懲らしめその財産をも分け與える。

その他、明清交替期に出版された『剿闖小説』という時事小説にもこれと重なる描寫が見受けられる。その第一回の筋書きは以下の通り

蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」

である。明末のこと、開封府の杞縣に李岩という擧人がおり、重税に苦しむ人々を私財をなげうつて助けたが、かえつて他の金持ちや役人の恨みを買つて牢に入れられてしまう。李岩を慕う大衆は牢を打ち壊して彼を救い出した。李岩はお上の罰を恐れてちょうど隣府で勢いを誇つていた流賊の李自成に従いその參謀となり、次のような作戦を進言する。

李岩遣心腹之人、裝作商賈四散傳布說「李公子仁義之師、不殺不掠」、又編成口號教導小兒們歌唱「喫他娘、穿他娘。開了大門迎闖王。闖王來時不納糧。」

李岩は腹心を遣わし、商人のなりであちこちに行かせて「李公子は仁義の師、殺さず掠奪しない」と言い廣めさせ、またスローガンを作つて子供たちに「食べてやろう、着てやろう。門を開いて闖王を迎えよう。闖王が来れば税もなくなる」と歌わせました。

李岩は貧困に苦しむ民衆に、李自成に従いさえすれば樂な生活ができるとの期待を持たせるが、これは白蓮岸が民衆を白蓮教へ誘う手法とよく似ている。實は『歸蓮夢』第三回には

李光祖自承女師的命、出外遍訪豪傑、聞得陝西一路、有個李公子、好賢禮士。他便將這教門聚集起來、竟到陝西、糾合人衆、與李公子合兵。

李光祖は女先生に命じられて、豪傑を廣くたずねるために出かけたところ、陝西に李公子という人がいて、賢を好み士を敬うと聞きつけました。そこで彼はこの教門の人々を集め率いて、陝西まで行き、人々を呼び集めて、李公子と兵力を合わせました。

という場面が出てくる。この通りごく短い記述であり、「合兵」の戦果についても何も書かれていないものの、『歸蓮夢』に「李公子」な

る人物が出てくることは極めて重要と思われる。佐藤文俊『李公子の謎』(汲古書院、二〇一〇)によれば、明末、陝西の李自成を中心とした流賊の侵攻が、同時代の特に江南文人によつて文字化され伝えられる中で、流賊が仁義を重んじ民を哀れむことが強調されたため、民衆の間でもそれが誰を指すのか曖昧なままに「李公子」と呼ばれる存在への期待が高まつたという。『歸蓮夢』には他にもこの李公子傳承と重なる部分があり、例えば『剿闖小説』で李岩が李自成に「尊賢禮士(賢を尊び士を敬う)」ことを勧めているのは、『歸蓮夢』で李公子が「好賢禮士」とされることと一致する。また「白蓮教」内では捕虜にした婦女を凌辱した者は斬首に處すという軍律があるが(第七回)、前掲論著によれば、李自成軍に關する當時の言説の中には、彼らが厳しい軍律を定めているという内容が含まれていたという。

「白蓮教」においては、民間宗教における弱者救済という側面が強調されているが、蘇庵主人が李公子傳承から影響を受けたとすれば、白蓮岸が「英雄」扱いされる所以も理解できるのである。

五、眞如和尚と佛教

白蓮岸が眞如和尚との師弟關係を公言し、眞如和尚の「戒律」によつて人助けをする人々に語つていくように、「白蓮教」は湧蓮庵の眞如和尚から多大な影響を受けている。眞如和尚の一風變つた來歴は第一回に詳しく述べられている。彼はもともと讀書人であり、「儒釋道三教、最易騙人的是釋教(儒佛道の三教のうち、最も人を騙しやすいのが佛教だ)」、「將過世渺茫無據之語言、騙現在極其要緊之財物(和尙は死んだ後のはつきりせず根據もない話で、今現在とても大切な財物を騙し取っている)」と佛教を忌み嫌っていたが、後に意外な轉身

を遂げる。

已後思量必定如何解破眾人之感、他就發起大願來、把佛經上「現身說法」四字行個規矩。遂謝絕家計、也去削髮披緇、做一個苦行和尙。

後に必ず何とかして衆人の迷いを断ち切つてやろうと考え、彼は大願を發して、佛經にある「現身說法」の四字を規律としました。やがて家を引き拂い、落髮し黒衣をまつて、苦行の和尙となりました。

現身說法とはもとと佛教語で佛や菩薩が種々の姿に化身して佛法を説くことであるが、後には自分の身をもつて人を教え導くことを喩えている。すなわち、自ら荒地を耕作し、收穫した作物を賣つて得た銀をことごとく貧民に施して、このような苦行を二十年續けた。佛教を否定していた人物がある日突然僧侶になるということは一見矛盾しているものの、弱者救済の思想という面では一貫している。彼が佛教を否定するのはただでさえ貧しい民衆から金品を取り上げるためであり、自身が僧侶となつては逆に金品を施して民衆を救うのである。蕭相愷氏は、儒教から佛教へという經歷を持ち世俗の考えに囚われない眞如和尚は作者である蘇庵主人自身の投影ではないかと推測するが、この見方には説得力がある。その後

忽然一夕、燈下現出一尊金剛來、口中朗誦經內四句偈言「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應做如是觀」。那眞如不慌不忙、立起身來道「你的話甚好、我已明白了」。他原是識字明理的、因自號曰眞如。

ある夕方に突然、灯火の下に一尊の金剛力士が出現し、口で經典中の四句の偈言を朗誦して「一切有爲の法は、夢・幻・泡・影の

如く、露の如く亦た電の如し。應に是の如きの觀を做すべし」と言いました。そこで眞如は慌てず騒がず、立ち上がって「あなたの言葉はすばらしい、私はもうさとりました」と言いました。彼はもともと學問があつて道理をわきまえていたので、このことにちなんで自らを眞如と號しました。

そして眞如和尚は湧蓮庵に隱棲する。ここで佛法の守護神である金剛力士が唱えている四句は鳩摩羅什譯『金剛般若波羅蜜經』の一節であり、六つの喩えが含まれていることから「六如偈」とも呼ばれる。

白蓮岸が湧蓮庵を出る時、眞如和尚は、

我待放你出去、只可惜世上這些平人、不知受你多少累、豈不可恨。

我如今也索罷了、這也是天數如此、非干我老僧之事。

私はおまえを行かせるつもりだが、ただ世の中の罪もない人々がおまえのせいどれほど迷惑をこうむるかを思うと恨めしい。私はどうしようもない、これも天の定めた命數で決まっていることで、この老僧が口を出すことではない。

と仕方なく許可しているが、この「天數」という言葉は、白猿が「白蓮教」を評する臺詞の中にも出てくる。すなわち第九回に

我曾傳下他一卷天書、要他救世安民、不想出山以來興兵構怨、這也還算是個天數。

私がかつて彼女に天書一卷を授けたのは、世の中を救い民衆を安んじさせるため、山を出てから兵を起こして恨みを買うとは思わなかったが、それも天の命數というものだ。

とあるのがそうである。M II ポルケルトは『平妖傳』にみる道教的反亂者の倫理的な性格で、聖姑姑と蛋子和尚が正しい道德觀を持ちながら王則の亂に荷擔した理由として

政治的大變革（『平妖傳』によるとその原動力は魔術によつていとう）は、本質的に人間の側の裁きや責任の缺如から起ることを除けば、偶然に續發するものではないということである。そのような場合には、かれらがかれらの義務として理解していることを遂行しようとする高邁な理想をもつた正直な人間が、必要（天書、天の計畫）から離れて、一般の安寧にとつて害となるという企てに協力するというのがしばしば起るのである。この句の前半は、たしかに儒の教えにあたり、後半は道の釋義なのである。

と述べている。「一般の安寧にとつて害となる企て」が理想を持つ人間によつて偶然でなく行われうるといふ「道の釋義」は、『歸蓮夢』にもほとんどそのまま當てはまるが、同時に佛教的な考え方も『歸蓮夢』では大きな意味を持つている。白蓮岸の反亂が失敗したのは王昌年への「情欲」に迷つたのが原因だが、情という問題について、眞如和尚は第十二回で、王昌年に裏切られる夢を見た白蓮岸にこう説いている。

大凡紅塵中事只瞞得無知無覺的人。……這個「情」字自古已來騙盡多少英雄。原來這個「情」字不但色慾愛戀、男女私心叫做有情、就是殺妻求將、殺子要君一段好名立節之心也叫做有情。……及至死時、名在那裡、利在那裡、始悔從前、不惟作惡種種孽障甚覺無謂、就是爲善種種好事也是餘文。

そもそも俗世での物事は無知無覺の人間しか騙せない。……この「情」という字は昔から何人も英雄を騙してきた。實はこの「情」という字は、色欲や愛戀、男女の私心を有情と呼ぶだけでなく、（吳起のように）將軍の地位を得たいがために妻を殺したり、（郭巨のように）君子たらんとしして母のために子を殺そうとしたりする、

名を好み節を立てようとするかりそめの心のことも有情と呼ぶ。……死ぬ時には名も利もどこにもなく、はじめて昔を悔いて、悪をなし罪業を犯したことを無意味に感じるばかりか、善をなし善行を積んだことすら餘分なことと思うだろう。

ここで眞如和尚は、男女の「色欲愛戀」と並べて名節を求める心をも「情」として批判している。「白蓮教」は白蓮岸の名聲を求める野心から創立されたものであり、たとえその志によつて善事を行なつたとしても、眞如和尚の視点からすれば、所詮は王昌年への色欲と同じく俗世に屬するものにすぎない。『歸蓮夢』序文に「歸蓮、因蓮而始歸者也（歸蓮とは、蓮によつてはじめて歸ることである）」とあるのは、物語の中で解釋すれば、蓮の花の生まれ變りである白蓮岸が世の無常を理解して悟りを開いたということを指すのだと考えられる。この序文は先述の六如偈を引いて、

六如偈言首推「如夢」、謂之曰如、猶有比擬之詞。
六如偈言は眞つ先に「夢の如し」を擧げており、「如」とはたとえる言葉である。

と述べ、また「大地山河一夢局也（大地山河は一局の夢である）」とも言つて、一切は夢のようであるというよりも夢そのものだと主張する。そもそも眞如という名自體も佛教語から來ている。『望月佛教大辭典』第三卷（世界聖典刊行協會、平成六年）「眞如」の項を見ると、「眞實にして如常なるの意。又如如、如實、或は單に如とも名づく。即ち諸法の眞實如常の性を云ふ」云々とある。つまり『歸蓮夢』の物語世界においては、すべて夢のようにはかないものの中で、唯一眞如和尚と彼の體現する透徹した世界だけが眞實にして恆常不變の存在とされているとも理解できるのである。

そしてこうした佛教的世界觀こそ『歸蓮夢』獨自のものである。『歸蓮夢』には確かに神魔小説や才子佳人小説のような側面があるが、序文や結末から判斷して、物語の主題は白蓮岸という人間が浮世での紆餘曲折を経た後に悟りを得るまでの歩みなのである。このように一人の人物に寄り添つてストーリーが展開していくために、民間宗教による反亂を扱っている他の小説と比べて、『歸蓮夢』の「白蓮教」にはその民間宗教としての活動に具體性が附與されたと考える。

結び

『歸蓮夢』で女主人公白蓮岸が創始した白蓮教には、方術を操る、民衆に施しをするという特徴がある。これは『平妖傳』や『女仙外史』といった民間宗教による反亂事件を扱つた他の小説とも共通しており、『歸蓮夢』もこれらの小説も同じく當時の民間宗教に對するイメージを反映していると考えていいのではないか。その中でも特に『歸蓮夢』の白蓮教は主人公が民間宗教を創立したり道教的な符籙を用いて治病したりという、現實の民間宗教に近い姿を持っている。その性格づけは弱者救済の側面を強調した肯定的なものであるが、物語全體の中では「白蓮教」は俗世の象徴でもあり、「白蓮教」の失敗は白蓮岸を悟りに至らしめるための必然なのである。

最後に、本稿で『歸蓮夢』と比較對照した作品は「白蓮教」の名を出さないものが主であったが、今後は徐鴻儒率いる「白蓮教」の反亂を扱つた『七曜平妖全傳』などを題材に、小説の中の民間宗教像という主題についてさらに考察を深めていく豫定である。

注

- (1) 『夢覺關』の作品自體は佚、序文は胡文楷『歴代婦女著作考』五百九・五百十頁（上海古籍出版社、一九八五）に収録。
- (2) 本篇の四三八頁。
- (3) Bibliothèque nationale de France の gallica Bibliothèque Numérique (<http://gallica.bnf.fr/>) で公開。
- (4) 蘇庵主人『繡屏縁』は元代を舞臺に楊貴妃ゆかりの屏風を持つ青年が五人の美女と關係し、全員を娶るという内容の全二十回の人情小説。上海古籍出版社『古本小説集成』ほか所收。
- (5) 中川諭「明代長編小説における「文繁本」と「文簡本」および『三國志演義』諸本三系統の關わり」（東北大學文學部研究年報第四十四號、一九九四）参照。ここにまとめられた文簡本の刪節方法は『歸蓮夢』に當てはまる。
- (6) 『宋明清小説叢考』二百四十六頁の澤田氏藏本の説明と矛盾なし。
- (7) 同書目でこれと同版とされる東大文學部藏本（森槐南舊藏小説十種『歸蓮夢』）は長らく所在不明状態にあり、調査不能であった。
- (8) それぞれの第一回、第六回、第十二回を比較して調査した。
- (9) 「禁書總錄」卷上、五八頁（陳乃乾『索引式的禁書總錄』、北平富晉書社、一九三二）。ただし陳乃乾の據つたという『清代禁燬書目四種』ではこれを確認できなかった。あるいは「禁書總錄」の據つた別の禁書關連資料に見えるものなのかもしれない。なお、この目録には「歸蓮夢」の作者が錢謙益であるように示されているが、なぜそうした誤りが生じたかは不明である。
- (10) 雷夢辰『清代各省禁書彙考』四十二・四十八頁（書目文獻出版社、一九八九）。
- (11) 百六十三〜百六十五頁（雄山閣出版、昭和六十二）。なお白蓮教の定

蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」

義をめぐるは未だ議論が続いており、例えば馬西沙ほか『中國民間宗教史』（中國社會科學出版社、二〇〇四）は韓家が茅子元以來の彌陀信仰をもたず彌勒を信奉していたことから白蓮教ではないとするが、劉平『中國祕密宗教史研究』（北京大學出版社、二〇一〇）は元末の時點で白蓮教は既に彌勒信仰を吸収していたと論じる。本稿第四節にも白蓮教に關する記述あり。

- (12) 古田敬一主編『拍案驚奇譯注1 唐賽兒の亂始末記』（汲古書院、二〇〇三）参照。
- (13) 野口鐵郎『明代白蓮教史の研究』、鈴木中正『中國史における革命と宗教』（東京大學出版會、一九七四）参照。
- (14) 五十七〜百十三頁（研文出版、一九九〇）。なお萬晴川「白蓮教與『歸蓮夢』」は『歸蓮夢』の物語が「還鄉」信仰に沿って展開し、殊に白蓮岸の運命にそれが表れていると論じる。
- (15) 『四庫全書存目叢書 子部六十・術數類』（齊魯書社）所收。
- (16) 王則の亂については、重松俊章「唐宋時代の彌勒教匪」附、更生佛教匪（九大史學會『史淵』第三輯、昭和六）参照。
- (17) 『道法開元』、『千金翼方』のいずれも道藏正乙部所收。
- (18) 『新編割闖通俗小説』とも、『古本小説集成』所收。
- (19) 酒井忠夫編『道教の總合的研究』（國書刊行會、一九七七）所收。